

中村武羅夫

後藤宙外氏



後藤宙外氏



近來後藤宙外氏の活働は真に目覚ましいものである。日本の文壇を一人で背負って立った如く、文壇は言わずもあれ、劇界にまで嘴を入れて、論戦苦闘する様を目覚ましいと言わずして何と言おう。総ゆる自然主義を向うに廻わして、相手関わず食ってかかる勇氣は恐ろしいものだ。嚙ぞ氣骨が折れるだろうと余計のことだがお察しする。

余の宙外氏に面謁の榮を得たのは今年の春、未だ肌寒

い三月の末、曇れる空に風さえ吹く日の午後、鎌倉雪の下、其書齋に於てである。

宙外氏は丈高からず、顔長からぬ方である。色の黒い口髭の濃い、特に其顴骨の秀でたのは、一際目立った。

余は嘗つて大町桂月先生の人相学に顴骨の秀でたるは活動の盛んなる相なりと云うことを聞いた。成程桂月先生の人相学に偽りはない。宙外氏は盛んに活動する人である。創作も遣る。評論も遣る。雑誌の編輯も遣る。文芸講演会で演説も遣る。訴訟も遣る。怠け者のみ多き文壇に一人吾が活動の人宙外氏を有するは、以て日本文壇の

光栄とすべしである。

一見した所、宙外氏の客に接する態度には、少しの落付きもない。絶えずそわそわして居る。煙草を吸う。茶を啜る。火箸で灰をいじる。見て居ても誠に目まぐるしい程の忙しさである。話されることでも然うである。統一した或る話を諄々として首尾明瞭に説き進むと云うことが出来ない。性分だ。之れを話すかと思えばあれに遷り、あれを話して居るかと思えば、又それに遷る。三つぐらいの材料を彼方此方と遷すので、吾等は其話の要領を把握するに苦しむ。そして恐しく早呑込みの人である。

他の話を終りまで聞いて之を咀嚼すると云うことがない。初めだけ聞いて、後は好い加減な想像で遮って下さい、直ぐ自分の思うことを喋り出す。宙外氏の他人の論旨を攻撃する文章に、往々其論旨を穿き違えて食って懸る滑稽を見るは、則ち此故であろう。忌憚なく一口に評すれば、性急なのだ。軽卒なのだ。

宙外氏は又極めて自信強き人である。自惚れ強き人である。吾が信ずる所は何所までも真なりとし、吾が言う所を以て何所までも是なりとする人である。自信も、自惚れも頼もしい、然し、それも余り頑固になると寧ろ滑



稽である。又宙外氏は大抱負家で、自然主義などと云う魔道に陥れる日本の文壇を自分の力で救済する意りで居る。其意気は真に愛すべしではないか。如斯大抱負も、要するに共頑固なる自信と自惚れとから生れて居るのだ。

余は、宙外氏が今後作家として、不朽の作とまでは行かずとも、到底すぐれたる作物を成し能わざる事を茲に予言するに躊躇しない。宙外氏は到底作家として立つの器ではない。恐らく今後宙外氏の作物は、従来の作物以上に傑出することは断じてないであろう。或は、最

早や創作の泉は涸れて居るかも知れない。吾をして如斯不遜の言を公表するを許せ。余は宙外氏に接して得たる其印象を大胆に告白するまでである。若し宙外氏にして今後盛んに創作の筆を執り、其創作にして傑出せる物あらば、余は潔く第一印象録の筆を焼かん哉だ。

最後に余は臍の緒切つて以来、未だ一度しか宙外氏に面会したことはなく、而して恩も怨みもないことを断つて置く。





日本文学電子図書館

---

現代文士廿八人

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

---

日本文学電子図書館